

英語の諺と助動詞

倉 島 史 憲*

1. は し が き

助動詞には、ほとんど語い的意味を持たないで進行相や受動態に用いられる 'be', 完了相に用いられる 'have', 疑問文、否定文や強調に用いられる 'do' の類を初めとし、話者の心的態度を表現し、語い的意味を明示する 'can', 'may', 'must', 'will', 'shall' などの 'modal auxiliaries', ⁽¹⁾ 'modal', ⁽²⁾ 'modals' ⁽³⁾ 等といわれる法助動詞の類との2種類があるが、本稿は、これらのうち、特に法助動詞が英語の諺にどのような意味効果を与えているかを探ろうとするものである。

その際、現在時制で示される真理と助動詞があることによって示される真理とのかかわり即ち、助動詞の有無による意味の差についても考えてみようと思う。

2. will, would の例

'will' は元々、古英語の 'wyllan' や中世英語の 'willen' に由来し、'to desire' (欲する) の独立した意味を持っていた⁽⁴⁾。'would' は、これら両英語の過去形の 'wolde' に由来する。⁽⁵⁾ 従って、特に古英語の時代には純然たる未来時制というものはなく現在時制がその代用をしていたことになり、文化の発展と共に、時の区分が必要になったのである。また言語が文字で書かれるようになると現在時制と過去時制の二つだけではあいまいさが生じ、思想の複雑さの増加と共に一層精巧にして正確な時制体系が必要になってきた。⁽⁶⁾ 中でも未来時制の役目を 'will' や 'shall' が演じるに至ったことは、常識的に私達は知っている、しかしながら、「意欲」は「意志」に通じ、更に「決意」に通じるように、'will' は基本的には 'to resolve' (決心する) を示し、⁽⁷⁾ 「習慣」、「推測」等の意味領域を表わすようになった。

2.1. 意志 (volition)

この意味では、生物・無生物、あらゆる人称に用いられ、主語の意志や願望を表わす場合である。読む場合には、'will' に強勢をおく。特に 'will not', 'would not' は 'refuse to-V', 'refused to-V' の意味に相当する⁽⁸⁾。以下意味上の分類によって記述してみる。

例1. Do (to others) as you would be done by.

この諺は、現代風にするならば、"*Bahave towards (Treat) others as you would like them to behave towards (treat) you.*" となろう。この諺に 'would' がなかったら、単なる受動態となり、この諺本来の希望を表現しないことになる。

例2. None so blind as those that will not see.

この諺は、正式には、"*There's (=There is) none so blind as those that will not see.*" という。この諺の 'will' は、「どうしても～する」、また否定語の 'not' を伴い、「どうしても～しようとしなない」の意である。従って、この諺の意味は、"*It is no use trying*

* 一科助教授

原稿受付 昭和61年9月11日

to make a person see what he does not wish to see.”である。この諺の‘will not’を‘do not’とすれば、この諺の言わんとする‘refuse to see’, ‘decline to see’⁽⁹⁾という‘decision’は含まれないことになる。これと同じ文体の“None so deaf as those that will not hear.”も全く同じ用法の‘will’である。

例3. Youth and age will never agree.

この諺の will は、例2と同様である。この諺は、過去においても、現在においても、将来においても妥当性を持ち、“Opinions are always different between young and old men.”を表現している。この諺の‘will’を取除くと、つまり、“Young and age never agree.”といえは‘general statement’を示し、諺とはほぼ同じ意味を表現している。

2. 習慣 (habit)

現在時制による「習慣」は、単に事実として述べるだけであるのに対して、‘will’による場合は、「何を言っても強情に～する」といった非難・当惑などの感情が含まれるのが普通である⁽¹⁰⁾。この場合の‘will’について、“Habits in the present are nomally expressed by the simple present tense : but will + infinitive can be used instead when we wish to emphasize the characteristics of the performer rather than the action performed.”⁽¹¹⁾とあるように、行為者の特性を述べるものでもある。また、‘would’にもこの用法があるので、“Will and would may express habit or repetition, especially what is or was characteristic under certain circumstances (a) : also a natural propensity (b).”⁽¹²⁾としている。

例1. A drowning man will catch at a straw.

この諺は、‘will’の特性を汲んで、“A man in trouble is eager to depend on even that which may look useless.”とも“A man in trouble inclines to depend on even that which may look useless.”とも衍義できよう。この諺に‘will’がなければ単に現在の事実を述べるだけであり、行為者の感情は含まれないことになる。

例2. Boys will be boys.

Curme は、このような‘will’を、‘a strong inclination, tendency’であるとして、この用法例として、この諺に近い“Children will be noisy.”⁽¹³⁾を挙げている。Schibsbye は‘unaccommodating attitude on the part of the subject’⁽¹⁴⁾の例として、また Zandvoort は‘a natural propensity’⁽¹⁵⁾の例として“Boys will be boys.”を挙げているように、この諺は、“It is inevitable for boys to play tricks.”と衍義できよう。この諺を“Boys are boys.”としたら、“Boys act like boys.”を意味する‘factual statement’を示すことになる。

例3. Murder will out.

この諺を、Jespersen は‘volition’⁽¹⁶⁾の一例として挙げている。これは、‘will’が習慣を示すのか、意志を示すのか、区別しにくい一例といえようが、「四知」や「天網恢恢疎にして失わず」ともあるように、‘murder’のことの性質から、この諺は、習性・傾向のこの項に入れるべきだと考えられる。従って、この諺は、“Wrongdoing is sure to come to light sooner or later.”と衍義できる。この諺を、“Murder outs.”といえはどうかというと、‘will’がなくとも現在にも未来にも変らぬ意味合いがうかがわれるので、一真実を述べる英

文として成立する。反対の意の “Truth will out.” の ‘will’ も同じ意味用法である。

2. 推測(supposition)

これは二・三人称を主語とする用法で日本語の「～でしょう」と訳し、一般に「現在における推測」を示し、可能性のある推測を示すともいえる。^㉓ この意の形は、「命令形, and～」や ‘If-Clause, ～’ の形態で諺には見られる。この意味では, “He’ll be sitting in the airport. = I am sure he is sitting in the airport.”^㉔ 即ち “I am sure～.” と言い換えうる。

例1. Do as most men do, then most men will speak well of you.

この諺は, 「世間並みにしていれば, 人は良くいうでしょう」ということであるから, “It should be safe for us to follow the manners and customs of the place where we live.” と衍義できよう。この諺は, 命令形をとっているだけに, 後に続く節は, 当然 “……, then most men speak ～.” とはいえない。

例2. If you run after two hares, you will catch neither.

これは仮定法現在をとっている諺である。仮定法現在は, 現在または未来に関する不確実な想像を表わすが, この諺の場合の ‘If-Clause’ は, ‘automatic or habitual results’^㉕ を表現するために使われていると考えられる。従って, この諺は, “We cannot get two things at once.” とか “We should not be too greedy because we cannot get all we want.” とか “We should not want much at a time.” の気持を示す。この諺の ‘will catch neither’ の部分を ‘don’t catch either’ とした場合には, 必然的な内容を表現するので元の諺とほとんど同じ意味を示すといえる。

例3. If you sing before breakfast, you will cry before night.

これも例2と同様の仮定法をとり, 自然発生的・習慣的結果の主節を持っている。従ってこの諺は, “We should not take too optimistic a view of things.” とか “If we make merry too much, we are liable to be pesimistic soon.” という気持を示し, 例3は, ‘will’ がなくとも同意の文となる。

3. shall, should の例

‘shall’, ‘should’ はそれぞれ古英語の ‘sceal’, ‘sceolde’ に由来し,^㉖ 元来, 「義務・強制・必要」の意味を持ち,^㉗ 従って, 語源的, 基本的に「義務・必要」を表わす。^㉘ ‘shall’ が「義務・必要」の意が弱まって主語の意志とは関係のない運命的に起こる事柄も表わすようになる。時制の一致により ‘shall’ が ‘should’ になったり, 仮定法から ‘should’ が現在に関して用いられたりする。

3.1. 運命(destiny)

これは, 古風ないい方で運命・神の意志などによる必然または将来についての厳粛な予言を表わす。これは, 現代の ‘be sure to-V’, ‘must’ などに置き換えが可能である。

例1. As you sow, so shall you reap.

この諺の ‘shall’ は, 上記の説明の通りで, 「因果応報」とか「自業自得」を示す諺であるから “You must take the responsibility of your actions.” とか “As sure as you do right or wrong, so you must be rewarded or punished.” と衍義できよう。

3. 単純未来(simple future)

これは、英国にある用法で 'pure future' (純粹未来)^㉒ともいわれ、"One day we shall die."とか "I shall be 17 years old next month." のように必ず実現することを示す。つまり、"Formerly will was kept for intetion:I will wait for you=I intend to wait for you and shall was used when there was no intention, i.e. for actions where the subject's wishes were not involved:I shall be 25 next week...."^㉓とある通りである。しかし、今では、このような 'shall' のところに 'will' を用いることが普通である。^㉔

例1. He that stays in the valley shall never get over the hill.

この諺は、「谷の中にとどまる者は、決して山を越えることはない」と和訳できる。従って、この場合の 'shall' の特性を汲んで、"A person who has half a mind to see the world will know little of it." と衍義できよう。この諺から 'shall' を取り除いても過去、現在、未来においても成立するので、ほぼ同じ意味になる。

例2. He that touches pitch shall be defiled.

この諺は、「ピッチに触れる者は、手がよごれるだろう」と和訳でき、「朱に交われれば赤くなる」に相当するものである。この 'shall' の特性から、この諺は、"If you keep company with a bad man, you will be influenced by him."とか "We had better avoid bad companions in case they should have a bad influence on us." と衍義できる。この諺の 'shall be' の箇所を現在形の 'is' としても、ほぼ同じ意味を示す。

3. 義務(duty)

この場合、「～すべきである、～しなければならない」と和訳する、これに似た「命令」(command)の 'shall' は、法律・規則などの文に用いられるが、一般には 'must', 'have/had to', 'is/was to' がこれに取って代わる^㉕。その際、'should' では「命令」の気持は弱く、'must' や 'have to' よりも意味も弱く、'correct or sensible action' をも示す。^㉖

例1. Law-makers should not be law-breakers.

これは、「立法者は、法律違反者であってはならない」ということで、"Those who make laws should observe them." という気持を示す諺である。この諺の 'should not be' を 'are not to be' としても、同じ意味である。というのは、'be to-V' の形で「義務」を示すことができるからである。

例2. He should have a long spoon that sups with the devil.

これは、'should' の特性を汲んで、"When we are among bad companions, we should be careful not to be taken advantage of by them." と衍義できる。この諺を "He has a long spoon that sups with the devil." といえば、'factual statement' を表わし、諺が言わんとする意味・精神即ち、「義務」ないしは「必要」を示さないことになる。

4. can の例

'can' は、元来、'know' を意味し、'I can' といえ、'I know' であり、不定詞を伴うと 'I know how' を意味するようになり、さらに 'I am able to', 'I have power to' の意味を持つに至った、^㉗ "I can swim." は、ラテン語の "sciō nāre." (私は泳を知っている) に

全く一致する表現である。⁴⁰

4.1. 能力(ability)

これは、先天的・後天的に備わっている精神的・肉体的な能力を示し、「～する能力がある」の意味である。これは、生物・無生物について用いられる。また、これを、'is/am/are able to-V' や 'have the ability to-V' と言換えることができる。

例1. A mill cannot grind with the water that is past.

この諺は、「A fatal mistake cannot be helped.」とか「We cannot recall the things of the past.」また、「We should be careful of the way we live.」という気持の 'general statement' を示す。この諺を、「A mill does not grind with the water that is past.」といえば、'scientific statement' を示し、現在に限らず過去、未来においても成立するので、一種の永遠の真理を示すことになる。従って、例1 とほぼ同じ意味である。

例2. No man can serve two masters.

この諺は、'can' の用法から、「It is impossible for a person to be *true (faithful, devoted)* to two masters.」という気持を表わし、例1 と同様に 'general statement' を示す。従って、この諺を、「No man serves two masters.」といえば、'factual statement' を示し、諺とほぼ同じ意味である。

例3. One cannot be in two places at once.

この諺は、「二兎を追う者は、一兎をも得ず」を思わせ、「We cannot do two different things at two different places at the same time.」と衍義できよう。この諺を、「One is not in two places at once.」といい直しても諺として通る。

例4. You cannot get blood out of a stone.

「You cannot get water out of a stone.」という諺もあるが、こちらの方は、「We cannot expect to extract money from a person who either will not pay, or doesn't have the money to pay.」ということである。一方この例4の諺は、「We cannot expect human feeling from a hard-hearted person.」とか「A merciless person has no *tenderheartedness (tender heart)*.」と衍義できよう。この諺は、'inability' を示しているので、'cannot' を 'don't' とした場合は、'crude language' の感じがあり、教育を受けない人が口にしようとする感じがするが、やはり例1 や例2 のように諺と称することができる。

4.2. 可能性(possibility)

これは、日本語の「～ことがある；ありうる」に相当し、'may' が示す 'factual possibility' に対して 'theoretical possibility' を示すが、「Lightning can be dangerous.」において、'can' は、'general statement' としての可能性を示す。この文を「Lightning is sometimes dangerous.」と表現しても意味は上の文とほぼ同じである。⁴¹ 尚、'hypothetical possibility' には 'might' や 'could' を用いる。

例1. Things done cannot be undone.

この諺は、「What's done cannot be undone.」ともいわれ、「Once one takes action, it cannot be recalled.」、"Once action is taken, it cannot be erased." とか "Regret will not mend what a person has done." という気持を示す。この諺を、「Things done are not undone.」といえば、現在に限らず過去、未来においても成立する真理を示すこ

とになり、諺とはほぼ同じ意味を示す。また、この諺を、“Things done are not to be undone.”といっても諺と全く同意である。

例2. Two of a trade can never agree.

この諺は、“Two of a trade seldom agree.”ともあるように、“One is apt to think of one's own business as more thriving than the other's.”と衍義できよう。この両者の諺は、普遍性、妥当性の点から、全く同じ気持を示している、“Two of a trade are never to agree.”といえ、ば、“Two of a trade ever agree.”と同様に‘factual statement’を示すが、前者の方は「絶対に同意することはない」という感じである。

5. may の例

元々は、‘may’は‘mæg’という古英語に由来し、その意味は、「～の力がある；～の権力がある」であって、元来、‘I can’の意味であったが、‘can’がこの意味に専用され、「許可」(permission)、「可能性」(possibility)の意味を持つに至った。⁶³ また‘might’は、やはり古英語の‘mighte’や‘moghte’に由来する。⁶⁴

5.1. 許可(permission)

「許可」を示す‘may’は、‘allow’、‘be allowed to’、‘have permission to’、‘have a right’の意に相当する。⁶⁵ 同じ許可の‘can’と比較した場合、次のような差異がある—
You may park here. = I give you permission to park.

You can park here. = (1) I give permission to park. (2) You have a right to park.
(3) The police will allow you to park etc.

例1. A cat may look at a king.

この場合の‘may’は、話し手が許可を与えたり、拒否したりする場合に主に用いられるものであるから、この諺は、“Everyone is permitted to see what he or she wants to see.”や“A cat has a right to look at a king.”という気持を示す。この諺を、“A cat looks at a king.”といえ、ば、‘actual action’を示すことになり、諺の意味するものとはほど遠い。

5.2. 可能性(possibility)

この場合の‘may’は、命題内容が真である可能性があるという‘factual possibility’を示し、日本語の「～かもしれない」に相当する。可能性における‘can’の差異は—(1) The railway may be improved. (2) The railway can be improved. において、“Sentence (1) says merely that IN THEORY the railways are improvable, ie that they are not perfect. Sentence (2) could suggest that there are definite plans for improvement.”である。⁶⁶

例1. He that fights and runs away may live to fight another day.

この諺は、“Care is indispensable to the attainment of some object requiring courage.”という気持を示す。この諺を、“He that fights and runs away lives to fight another day.”といえ、ば、‘factual statement’を示すにすぎない。

例2. A lion may come to be beholden to a mouse.

この諺は、“What seems to be worthless or useless is sometimes helpful to people in trouble.”や“We should make much of trifling things. Later they are sure to

help us.”という気持の諺である。この諺を、“A lion comes to be beholden to a mouse.”といえ、*‘actual statement’* を示し、諺が示す *‘general statement’* にはならない。

6. must の例

must は、古英語の *‘mōste’* に由来し、*‘mōste’* は、*‘to be allowed’* という意味の *‘mōtan’* の過去形であった。⁸⁹ Onions によると、現在に関して使ったのは、仮定法用法であって、これは仮定法を使うことによって「義務」(obligation)の意味を和らげるためであったという。⁹⁰ そうだとすれば、*‘mōtan’* には早くから「義務」の意味、つまり *‘to be bound (compelled) to’* という意味が生じていたことになるであろう。

6.1. 必要 (necessity)

この意の用法は、命題内容が真であるとする話し手の査定を示すものである。

例1. Needs must (do) when the devil drives.

‘needs must’ は、*‘A man needs must do’* の省略である。この諺の *‘needs’* は、古語で日本語の「ぜひ；必ず；どうしても」の意の副詞である。従って、この諺は、“We don’t work until we are in distress.” とか “We will manage to do it when we can’t get out of it.” という気持を示す。この諺を、“A man does when the devil drives.” といえ、*‘factual statement’* を示すが、諺とほぼ同じ意味である。

例2. As you make your bed, so you must lie in it.

この諺は、“We are responsible for our actions.” と衍義できる。この諺を *‘must’* を用いずに表現すれば不自然な英文となるが、“As you make your bed, so you lie in it.” といえ、*‘must’* こそないが、諺に近い意味となる。

例3. Desperate disease must have desperate remedies.

この諺は、“If you find a person in terrible distress, you must take drastic steps to save him.” という気持を示す。この諺を “Desperate disease has desperate remedies.” や “Desperate disease requires desperate remedies.” とかといっても *‘factual statement’* を示すが後者の方が諺の意味により近い。

7. あ と が き

諺は、過去、現在、未来にわたり生き続けて真理を語り、われわれの行動の規範を示唆するが、その文法的時制は、英語では、古くは現在形で未来の表現ができたのであった。しかし、英語史が教えるように、文化が進み、精神活動が多様繊細になり、その言語表現に精妙さが求められるにつれて、時の表現も複雑化し、現在、過去、未来の時制的区別が成立し、助動詞の役割も重要になってきたのである。

ところが、諺には、“Faint heart never won fair lady.”、“Rome was not built in a day.”、や “Care killed the cat.” 等に見られるように過去形を取りながら現在においても未来においても普遍・妥当性を持ち（これは格言的過去と呼ばれる）、また、“All is not gold that glitters.”、“Misfortunes never come singly.” や “Slow and steady wins the race.” 等のように、現在形を取りながらいつの時代にも不変の真理として通じているものもある。これらは、助動詞、特に法助動詞にたよることなく、時の試練を超えて、忠告

し、あるいは警告してきたものであることは確かである。そこで、われわれに訴えているものが、内容的に 'factual statement' であるか、'general statement' であるか、それが法助動詞の有無により、どのように意味に差が生ずるか探求してみたのであるが、その結果、法助動詞使用は、文全体を和らげ、意味精神をより明瞭に、より具体的にし、且、'general statement' を示すのが普通であり、一方、法助動詞無使用は、単に 'factual statement' を示すものもあれば (2₁の例1, 2₂の例1, 3₃の例2, 5₂の例2等)、過去、現在、未来の三世にわたって普遍・妥当性を保ち、ほぼ諺に相当する精神を示すものもある (2₂の例3, 2₃の例2, 2₃の例3, 4₁の例1~3等)。また、'be to-V' を助動詞の代りに用いることによって、ほぼ諺と同じ品位と精神を示しているものもある (3₃の例2, 4₂の例1等)。

尚、ここに、例えば、法助動詞が二つ含まれる "He who would climb the ladder must begin at the bottom.", "Pens may blot, but they cannot blush." のような諺を扱わなかったが、それは本稿の2~6各節各項それぞれの所記内容に準ずることができるからである。

参 考 文 献

- (1) Geoffrey Leech & Jan Svartvik: *A Communicative Grammar of English* (London: Longman Group Ltd., 1975) p. 128. (以下 CGE と略記)
- (2) Diane D. Bornstein: *An Introduction to Transformational Grammar* (Massachusetts: Winthrop Publishers, Inc., 1977) p. 41.
- (3) Stanley J. Cook & Richard W. Sutesc: *The Scope of Grammar* (New York: McGraw-Hill Book Co., 1950) p. 91.
- (4) *The American Heritage Dictionary of The English Language*, ed. William Morris (New York: American Heritage publishing Co., Inc., 1971) p. 1465, p. 1548. (以下 AHD と略記)
- (5) *Ibid.*, p. 1465.
- (6) C. T. Onions: *An Advanced English Syntax* (London: Kegan Paul, Trench, Trubner Co., Ltd., 1929) pp. 107-108 (以下 AES と略記)
- (7) *Ibid.*, p. 135.
- (8) R. W. Zandvoort: *A Handbook of English Grammar* (London: Longmans, Green Co., Ltd., 1960) p. 74. (以下 HEG と略記)
- (9) CGE, p. 141. に "He won't take any notice. = He refuses/declines to take any notice." とある。
- (10) 杉山忠一『英文法の完全研究』(学習研究社, 昭54) p. 215.
- (11) A. J. Thomson & A. V. Martinet: *A Practical English Grammar* (London: Oxford University press, 1980) p. 198. (以下 PEG と略記)
- (12) HEG, p. 74.
- (13) George O. Curme: *Syntax* (Boston: D. C. Heath & Co., 1931) p. 364.
- (14) Knud Schibbye: *A Modern English Grammar* 2nd edition (London: Oxford University Press, 1970) p. 86.
- (15) HEG, p. 74.
- (16) Otto Jespersen: *Essentials of English Grammar* (London: George Allen Unwin Ltd.,

- 1960) p.272. (以下 *EEG* と略記)
- (17) *CGE*, p.131.
 - (18) *PEG*, p.199.
 - (19) *Ibid.*, p.187.
 - (20) *AHD*, p.1189.
 - (21) *EEG*, p.275.
 - (22) *AES*, p.135.
 - (23) A. S. Hornby : *A Guide to Patterns and Usage in English* (London : Oxford University Press, 1955) [岩崎民平訳『英語の型と正用法』研究社] p.153.
 - (24) *PEG*, pp.175-176.
 - (25) *Ibid.*, p.176.
 - (26) *Ibid.*, p.204.
 - (27) *Ibid.*, p.205.
 - (28) *AES*, p.38.
 - (29) *Ibid.*, p.138.
 - (30) *CGE*, p.129.
 - (31) *AES*, pp.138-139
 - (32) *AHD*, p.808.
 - (33) *PEG*, p.113.
 - (34) *CGE*, pp.128-179
 - (35) *AHD*, p.865.
 - (36) *AES*, p.139.

(本論は、昭和60年10月6日、愛知学院大学において日本時事英語会第27回年次大会で発表したものである。)